

令和七年度 入学試験（一般選抜試験A日程）問題

国語

受験番号

◎指示があるまで開かないこと

【注意事項】

1. 受験票を座席表の横に置くこと。
2. 試験開始後乱丁、落丁が無いかを確認すること。印刷不鮮明がある場合は監督官に申し出ること。
3. 机上には、受験票、鉛筆およびシャープペンシル、消しゴム、定規、時計（辞書・電卓・端末等の機能のあるものは不可・アラーム機能は停止）以外は置いてはならない。
4. スマートフォン等の電源は切ってカバンにしまうこと。
5. 解答時間は六〇分である。
6. 試験開始後最初に、問題と解答用紙に受験番号を必ず記入すること。
7. 試験時間中の途中退室は認めない。
8. 試験中に発病またはトイレ等で席を立ちたい場合には、挙手をして監督官の指示に従うこと。

【一】それぞれの傍線部に当たる漢字を含む熟語を、各群の中から一つ選び、番号を書きなさい。
(二〇点)

A	婦カ ^レ ン	① 循カ ^レ ン	② カ ^レ ン暦	③ 税カ ^レ ン	④ カ ^レ ン激
B	ギ ^レ 事	① ギ ^レ 務	② 講 ^レ ギ	③ ギ ^レ 術	④ ギ ^レ 論
C	報ド ^レ ウ	① 指ド ^レ ウ	② ド ^レ ウ員	③ ド ^レ ウ化	④ 車ド ^レ ウ
D	コ ^レ ウ想	① コ ^レ ウ動	② コ ^レ ウ式	③ 虚コ ^レ ウ	④ 成コ ^レ ウ
E	訪モ ^レ ン	① モ ^レ ン題	② モ ^レ ン絶	③ 名モ ^レ ン	④ 波モ ^レ ン

【二】次の作品の作者はどれか、それぞれ一つずつ選び、番号で答えなさい。(二〇点)

A 「吾輩は猫である」 B 「走れメロス」 C 「細雪」 D 「雪国」 E 「舞姫」

- ① 川端康成 ② 太宰治 ③ 志賀直哉 ④ 夏目漱石 ⑤ 芥川龍之介
⑥ 谷崎潤一郎 ⑦ 森鷗外

【三】次の文章を読み、後の問に答えなさい。(五〇点)

人と人との関わり合いは、幸せを生む可能性がある。これはここでの重要な^Aシ^レンとなりま
す。しかしそれを検討する上で、こんにちの日本社会（のみならず、広く先進国の社会）での「個
人化」の進展は、背景として重大な意味をもっています。社会学で考えている（社会の）「^①個人
化」とはどのようなものか、簡単にふれておきましょう。気をつけていただきたいのは、ここで
の個人化とは、俗に言う「人々が自分のことしか考えない、^Bリ^レコ主義的になった」という話で
はないということです。個人の態度や心理の変化ではなく、社会の変化（制度化された個人主義）
を意味しています。ただ、その結果、個人の意識が変化しているということはあるでしょう。

まず大前提として、今の社会が「近代」と呼ばれる時代の次の時代である、「脱近代」（または
ポストモダン）の社会であるという認識が、社会学には広くあります。この考え方を広めたのは、
フランスの哲学者であるリオタールであるとされるのが一般的です。リオタールは、近代とは、
皆が全員で信じていることができる「大きな物語」があった時代としています。それは、人々は啓蒙
する／されることによって知識を得て、理性的になり、土地や生まれた閉鎖的な環境から解放さ
れ、自由な社会になる、といった物語です。

人間は賢くなっているし、科学は発展している。自由な意思をもった人同士が話し合って（コンセンサス）、世の中はどんどん進歩していく、という、右肩上がりの発想を皆が共有していたのが、近代社会ということですね。

しかしこうした「大きな物語」が現在では成立しなくなっている。皆が共有できなくなっているというのがリオタールの主張です。それが脱近代の時代です。脱近代では、大きな物語の正当性について疑われるようになり、人々は固有の「小さな物語」をもつようになるとされています。ドイツの社会学者ウルリッヒ・ベックは、このような状況を、「諸個人が自分のアイデンティティ、生活史、恋愛関係・生活関係・コヨウ関係の『日曜大工』となる」と表現しています。

I ベックは同時に、そのような脱近代の状況は、良くも悪くも、自分の生活の状態に自分が責任を負うものとなる、と述べています。近代の社会構造から解き放たれた個人は、これに沿って行動しておけばよいというような、確実な知識や信仰やディキハンを失ったため、非常に不安定な存在であると指摘するのです。雑な言い方をすれば、いわゆる自己責任論、ですね。ベックによればそうした「個人化」状況で、個人は社会の中に、伝統とは異なるまったく新しいやり方で組み込まれる（再統合）とも指摘しています。

社会へ再統合する仕組みとして、ベックが代表的にあげているのが「市場」です。労働市場に参加するために、個人は強制的に生活スタイルやふるまいの仕方を変えなければなりません。マスメディアで宣伝される商品やサービスの購入が促進されることによって、人々の生活はかえって「**A**」されることも、指摘されています。言いかえれば、「ふつうの生活」が繰り返しレビで流されることによって、ありもしない「ふつう」に皆が憧れるようになってしまう、という表現ができるのではないでしょうか。**II**、ちびまる子ちゃんやクレヨンしんちゃんの家族のような生活をしている人が今、どれだけいるのでしょうか。ごく一部、あるいは全然ない可能性もあります。それにもかかわらず、それらの家族像が「ふつうの家族」だと思わされてしまっている人も多いのかもしれませんが。

III ベックは、こうしたマスコミの影響について、政治に関してもそれは大きいのだと述べています。マスコミは大衆としての人々を統制する手段となりました。これは、政治家がマスコミを使っているという側面だけでなく、マスコミ自身が政治を行なっているとも言えます。たとえば、政治家は嘘つきだ。政治は腐っている。国は無駄遣いばかりしている。というようなイメージをもっている人も、多いのではないのでしょうか。しかしそうした「イメージ」は、いったいどこから得られたものなのでしょう。政治学や財政学をきちんと勉強したり、データを分析したり、あるいは政治家と直接、長い時間接して得られた印象なののでしょうか。そう考えてみると、マスコミによって印象を「統制」されている可能性もあるように思いませんか。政治を「こうし

たい」というマスコミの意向によって、皆さんの考え方がある程度コントロールされていることも、あり得ることなのでしょう。

社会学における個人化する社会についての考え方を、まとめてみましょう。リオタールは、個人は伝統や因習から解放されたけれども、一人ひとりが賢くなれば自由になるし、幸せな社会が待っている、というような楽観的な社会観はもはや共有できなくなったことを指摘しました。皆が「小さな物語」を保持するようになった社会で、ベックが指摘するように、人々は新たな形で社会に組み込まれています。では、こうした個人化社会で、どのように人と人とはつながり、コミュニティをつくり、幸せになることができるのでしょうか。

言い換えれば、個人化という「概念」、あるいは「理論」を使って考えることで、みえてくる「現実」がある、ということ です。このことを社会学者のパーソンズはサーチライトを使って例えました。現実とは、^Eクラヤミなのです。私たちは何もわかっていない。しかし、概念というサーチライトを使って照らすことで、現実がみえてくる、ということなのです。今までに明らかにされていなかった現実を照らすものが概念である、と。概念とは何やら難しくものごとを表現することではないのですね。

このことで私がいつも思い出すのは、ある昔話です。あるところに、目のみえない人たちが動物のゾウとはどのようなものかを話していました。目のみえない人たちはさわってゾウを確認したのですが、ある人はゾウの鼻をさわったので、「あれは大蛇のようなものだ」と言いました。ある人はしっぽをさわったので「細長い縄のようだ」と言いました。足をさわった人は「太い丸太のようなものだ」と言いました。そうです。だれも、ゾウの全体像をつかめてはいないのでですね。しかしうそは言っていないです。

気をつけていただきたいのは、この寓話は視覚障害があるからだという話ではないということです。人間誰しも、ものごとについて偏った観点しかもてない。だから自分がすべてを知っている気になってはいけない、という教訓のお話なのです。

ね。そして、だからこそ、社会学（に限らず多くの社会科学）では概念という共通に理解された「道具」を使って現実をみることで、a のことがらを b のものにしていこう、と試みているのです。

（桜井政成『コミュニティの幸福論』より。出題の都合で一部原文を変更している）

問一 傍線部A～Eに関し、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 空欄 I III について、入れるのに最もふさわしい接続詞を次の選択肢の中から一つずつ選んで番号で答えなさい。

- ① たしかに ② また ③ たとえば ④ しかし ⑤ つまり

問三 傍線部①「個人化」とはどういうものか。本文中から二十字以内で抜き出しなさい。

問四 空欄 ア について、入れるのに最もふさわしい語を次の選択肢の中から一つ選んで番号で答えなさい。

- ① 中心化 ② 標準化 ③ 相対化 ④ 巨大化 ⑤ 実質化

問五 空欄 イ について、入れるのに最もふさわしいことわざを次の選択肢の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 当たるも八卦当たらぬも八卦
イ 二兎を追う者は一兎をも得ず
ウ 骨折り損のくたびれ儲け
エ 思い立ったが吉日
オ 人のふりみて我がふり直せ

問六 a と b の組み合わせとして最もふさわしいものを次の選択肢の中から一つ選んで番号で答えなさい。

- ① 主観―客観 ② 未知―既知 ③ 単純―複雑
④ 一般―特別 ⑤ 国内―世界

問七 本文の内容と合致するものを次の選択肢の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 現代社会では、マスコミを信じず、自分で考えて行動することが必要である。
イ 概念で物事を理解するのは極めて危険である。
ウ 今、社会に蔓延している自己責任論はよくないものである。
エ 現代の日本では、人々がみな自分のことしか考えなくなってしまうている。
オ 現代では、人々が偏ったイメージを持っている可能性が高い。

【四】 次の文章を読み、後の問に答えなさい。(三〇点)

歴史学の入門書には、たいてい「史料」というものが歴史学にとって A フカケツであるということが書かれています。さて、史料とは何でしょうか。

歴史家の仕事は、過去の出来事や状態について、今を生きる人びとに説明することです。歴史家は過去にどのようなことが起きたのか、過去の社会がどのような状態にあったのかを、現在の想定読者に向けて説明します。その際、歴史家は、過去の人間が残した何らかの痕跡をもとに、過去の出来事や状態についての説明をします。

出来事や状態を説明する何らかの根拠となる情報源が史料です。たとえば、ある政治家が特定の時点で何をしていたのかを知るために、その政治家がつけていた日記を読んだりその政治家が書いた手紙を読んだりします。また、ある時代のある地域の土地取引の^Bトクチョウをみるために、その時代・地域の土地売買契約書を検討したりします。

単純化した例で話をすすめましょう。「山田という人物は、一九〇〇年一月一日にぼんやり村に五ヘクタールの土地を買った」という文章を書く時に、そうした内容の土地売買契約書が残されていることを根拠として文章が書かれていた場合、その土地売買契約書は、その文章を書いた歴史家にとって史料として用いられていることになるわけです。

①なぜ根拠が求められるのでしょうか。一般論として「根拠なしにものを言っではいけない」と言っってしまうばそれまでなのですが、日常生活では、人は結構な割合で、特に根拠なしにものを言っってしまう。山田が土地を買ったのが、一九〇〇年ではなく、つい昨日のことであったと考えてみましょう。「山田、ぼんやり村に土地買ったって」「へー」「金持ちなんだね」「そうだね」という会話をするときに聞き手が、「山田が土地を買ったとあなたが主張する根拠はなんですか」と聞かないということは十分あり得ます。

一方、やはり山田が土地を買ったのが昨日だとして、ある不動産^Cチュウカイ業者の事務所のなかで、一人の社員が、「山田さんはぼんやり村の五ヘクタールの土地を買うことを決めました」と上司に報告したとしましょう。上司は「へー」といつて終わりにするわけにはいきません（「それはよかった」と言うかもしれません、それで終わりにするわけにもいきません）。部下も上司も、こういうときには、代金はどのように支払われなければならないか、土地の売り手にどのようなそれを伝えるか、土地の^Dトウキはどうするかといった諸手続きを^Eジュクチしているはずで、その一々について書類が作られるでしょう。つまり、「山田がぼんやり村に五ヘクタールの土地を買った」という出来事を、時間が経った後も示すことができる、根拠となる書類が残されるわけです。

土地を売ったり買ったりするときに作られる典型的な書類は売買契約書ですが、それでは、こうした売買契約書が、根拠として登場するのはどのような場面でしょうか。

安藤と石井が会話をしているとしましょう。安藤が、「山田、ぼんやり村に土地買ったんだって」と言った後に、石井が「本当？ それは確か？」「本当にぼんやり村？ ぽかぽか村じゃないの？」

と突っ込みを入れるとすれば、それは石井の側に何か事情がある場合でしょう。

では歴史家の場合はどうでしょうか。今度は、「山田という人物は、一九〇〇年一月一日にぼんやり村で五ヘクタールの土地を買った」という一文を、歴史家が読者のために書こうとしている状況を仮定してみます。

この一文だけが、何の根拠もなく提示されたとき、読者が思うことは、「本当か?」「根拠は何?」ではなく、「それで?」ということでしょう。これだけでは②歴史家が何をやりたいのかわかりません。わからないので、根拠があるのかないのかを聞く気も起きないでしょう。

それでは、歴史家が以下の三つの文章をつなげて書いた場合はどうでしょう。

- ① 山田という人物は、一九〇〇年一月一日に、ぼんやり村に五ヘクタールの土地を買った。
- ② 一九〇〇年時点のぼんやり村に土地を持っていた一〇〇人のうち、一ヘクタール以上の土地を持っているものは五人しかいなかった。
- ③ したがって、山田は、ぼんやり村のなかでは、広い土地を持っているグループに属している。

読者は、「ああそうですか」で済ますこともできますが、もし突っ込みをいれたい読者がいたとすれば、次のような突っ込みを考えることもできます。

まず、①については、本当は山田が土地を買ったのは一八〇〇年だったりしないか、本当は一ヘクタールだったりしないか、本当は山田じゃなくて岡田が買ったのではないか、という突っ込みが入る可能性があります。

②については、ぼんやり村に土地を持っていた人のうち一ヘクタール以上の土地を持っていたのは、本当は五人じゃなくて五〇人じゃないのか、ぼんやり村に土地を持っていた人の総人数は一〇〇人じゃなくて一〇人じゃないのか、といった突っ込みが入られるかもしれません。

①②③の文章を読んだだけで、こういう突っ込みを入れる人はそれほど多くはないでしょう。こういう突っ込みをする人として考えられるのは、この文章を書いている歴史家とおなじく、ぼんやり村の歴史について詳しく知っている別の歴史家でしょう。例えばその別の歴史家が、山田という名前の人物が一八九〇年に死んでいるということを知っていたりすれば、「本当に一九〇〇年?」という突っ込みを入れることになるわけです。

歴史家の叙述は、過去の出来事・状態についての情報を、複数つなぎ合わせて、相互に関連付けることによって成り立っています。ある出来事についての情報は、他の出来事がおきた理由として提示されたり、別の出来事と比較され、その類似と相違点が示されたりします。要するに、それぞれの情報は、何らかの方法で使われるわけです。

多数の出来事や状態についての情報を使うとなれば、一つ一つの情報に根拠がないと、組み立てられた叙述全体が崩れてしまう可能性があります。根拠のない情報を使つて、「そこ間違つてますよ」と言われたら、全体としての作業が無駄になつてしまうので、根拠がないとまずいわけです。

（松沢裕作『歴史学はこう考える』より。出題の都合で一部原文を変更している）

問一 傍線部A～Eに関し、カタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部①「なぜ根拠が求められるのでしょうか」とあるが、その理由を本文中の言葉を用いて説明しなさい。

問三 傍線部②「歴史家が何をやりたいのか」とあるが、その理由を本文中の言葉を用いて説明しなさい。

受験番号

【一】

A
B
C
D
E

【二】

A
B
C
D
E

【三】

A
B
C
D
E

問二

I
II
III

問三

--

問四

--

問五

--

問六

--

問七

--

【四】

問一

A
B
C
D
E

問二

--

問三

--